



本草綱目拾遺



貞女列女判下目録

- 一 半井氏夫婦苦行の事
- 一 慈母苦行の事
- 一 春木氏乃妻苦行の事

貞女列女の判下

今これ也

一 ちうに平井何某と云人あり甚難ハちうは清書行の私
 先年去ち守に仕友の時平井氏の書簡に云愚婦
 矣云れ有と云く知たり私むひたり天竺のほ島
 に以對教あつと一子のゆを頼と平不家におりし如
 猶よ言云此因家愚何と云けしむ孫愚不産けを
 家味たり何して知流よと平井氏再書云先生の
 以我子先生ののたと流と云る字のゆせは善なりと
 告る人何り要ぬゆのく一子善也先生れは愚善るハ
 時流と云く流流何と云一子何れじとありぬ故
 夫云れゆは知し平井氏の書簡と云く愚蒙魯

純不徳より虚名の譽あつたは恥て独居赤面し予
既又軍兵す武内乃市廩に任じ時に平井氏と勝し
前にまゝも未年若く田舎をさうといふも人殺上
病あり申しうずす予々軍兵は幾く病の危しうら
びしはくくく向ひぬぬ年れ同主婦の芳徳仁惠
甚厚して報ずるにかなし一月くに終て困詰す對
親のたびに人づらのおしかりに慨感す予はて
終日終つといふも此まがもさし一け一業に
て有念よまうすまは先生れ息より愚まは先
世の才子より心交れ交に意とくさりんをまげて
此をすべれよあさす素飯と此をたきけ法ひく
心安く困詰義倫あべし愚まは縁あも一飯の

憂さし此ませふれば延もあつた解言に光る
氏依ごと予婦人の善に感づけしは来むら
二年にし平井氏老病ありて死去す病中予序
安否と問ふ所辛若甚しといふも予不舎バくさ
らうく婦人の看病とんらに甚深切にし愛若
美に親久よあつた既に終て子息登東よるとも
て来着は慈母の年と息のひびくはよはさし先
腹なるべし然ども慈母の愛生きたるに美子に
らさず息れ母よけくもまこと実母乃ごとし予井氏
卒て婦人悲歎紅淚甚し一断髪のこけり
顔とす寸紅白粉とら只齒と保より予に回
云髪とさうり紅白と去て伝とすといふも齒と保

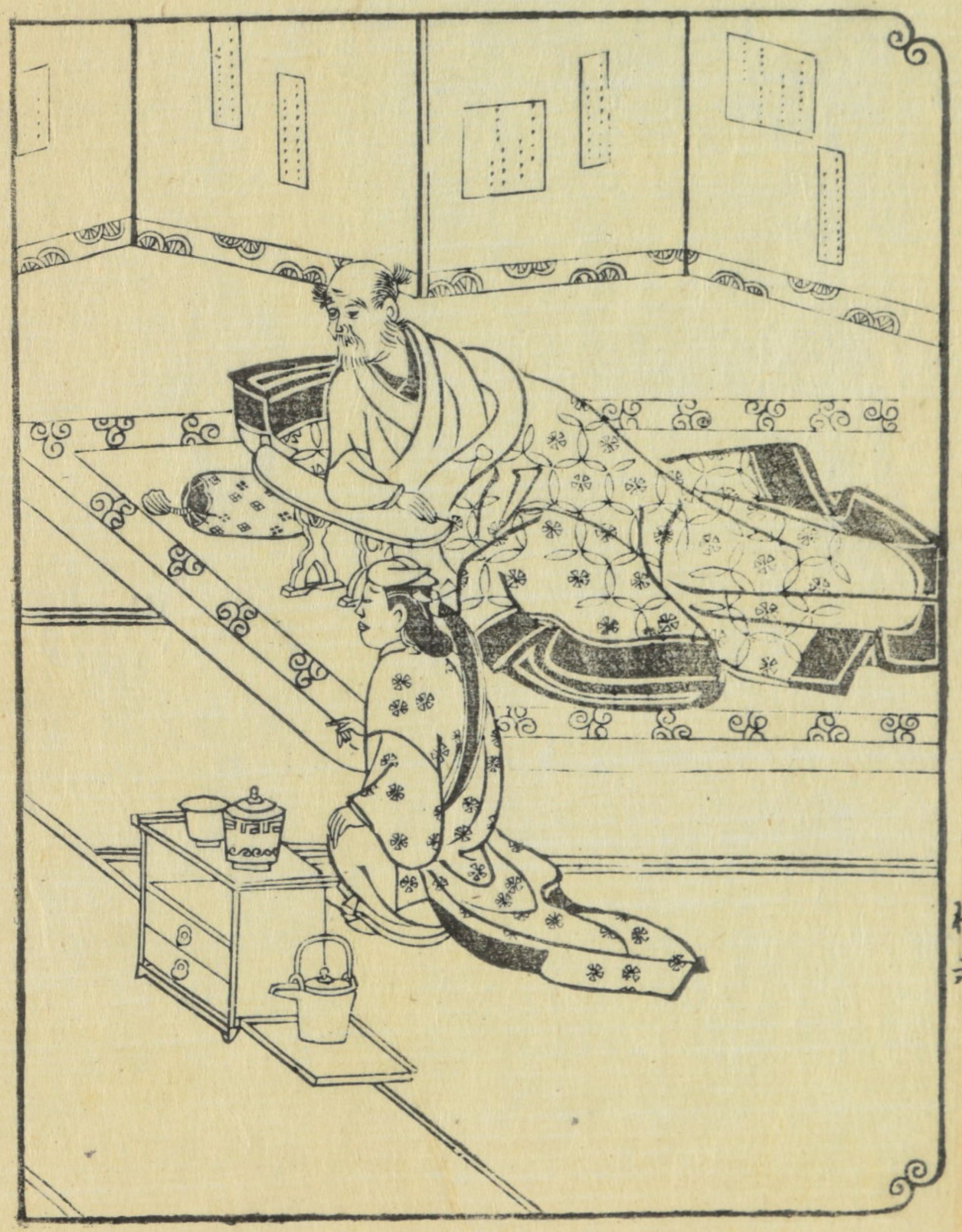
不信よ似たり化よりん人の儀さゆんといひてはなほ
黒齒れらち伊地へんぐりくれば美人は對する時
に秘なるんは同妾甚ましくをばしむるは同い
ども妾乃と志す人の不明は中ぎんひんよふより
す親い命とすむ平養を思いまご女容儀しむば
いども志すし後といひ我胡の婦人齒と保子ハ美
からゆ多んよ何ぞす故ありくむしりめれど
それ紙のハ太陽圓より婦人ハ隱柔の粹より陽みに
生もく氣血上升より甚し病とせし齒と換す
ふみおがし一珠ハ比よしそ口熱はさぬし氣と降し
齒の精をこくは故に婦人齒と保て是はたよく今の
婦人を必くするに十人が九人の骨腰不足にして上外

甚し齒とそめてたくれどしえんハ上たより
婦人のハと保つめまたに志りこれ秘のそより
故に或古書に云東海有婦人皆齒と黒くしむ記せ
し既よして吾胡の礼儀とかなるはよ故と舊の
寡とよりて貞はちるハ皆玉齒かり田舎の婦人の
まのびなうがんよりしむるは礼儀のゆと志すは
白齒よりたとの寡よりとも何ぞか凡の礼とや
びたる齒は保すも心不義なる人のふ養するん
とと保細粉とほどぬも負なる人の負するん
ととるに行義とくしてふ養なる人あり外平
人よして心正しれあつ人の善はうらにもうじ
品にも見へど人見て志づくは悲しむるは

歎き去りに埋ひく何ぞよかひざらん 眞女のふとん
いさねよく何ぞ外忍よおまの終つんや上落の貞女さ
らんやとおひぬく男中といへども子者れぐしやう
くむげむさくしと終つてひ風俗志づくに仇とん
ふみゆがうらハ儒者といへんづりおもしきんづり
はあてあさるるに見らるし 謝て婦人の貞女ぞんハ
誰ぞ見らるし 謝るし 謝るし 何となく目にさぬ
しに借風ふまどつりむらさかやうげちうにまじふ
ててん女やむむ貞女やむむ人もあらずけくんは終
固にいさねよく終つてたのしみさらんしあうま
はくせんしと後刻自得す平井氏忌明て公令
トて息ぬまのあす行て謝して後室を境とるん

再會の期さうん夏は又亡夫乃事成いひく悲
歎け予と又落涙しと 慈恩の深切に報ぐ期
かうんやと涙れし 別離と述懐と後室亦予
曰亡夫道を去るし先生と慕ひて切なり愚婦女に
てなとしとびあふれども亡夫の案がにあらざる
歎き終ハ忌服れ凶系神主の法亦四季奉祭のよこて
と教へ終くはあはぬし 愚息とたし供せんと予お
記してあふ悦びてぬすこれも又善女より寡婦と
なりて末年と終ぐ故は貞列あるはあらずあうま
とてはあはぬ其志切なりて終薄なりおとみ
ず貞なる守らんにいさねあらざり

賛



後人よりして云々も中々そのはあのはは
よせうねく何ととむじも振替ゆけつそと
かたれりのありと死なすまず唯武官と守
てたかるとむじにのこる其なうがけ
とるんてあさずしとけいよあまにうれ出と
ア二よとつとつりあさうさ志のうらとれあ
ら平井氏れあつて紀とちりつとバ子にあせと
ざりて何つくはりぐさ甚しく其に交あつも
の一人しるし平井氏ととくにううして皆悦
あよえくあく大坂よりうらあのみを約これと
すてたよあれ水に撮取はうさ甚しく平井
氏に謂云水子の罪さくさうすまの命にま

うせくんのやせんずらまに刑罰せんと平井氏
て云らこの咎にわらず赤子のあやまらめど
あつあつおろそかにしてくはらさんやあもはら
の罪事あまらるるあはれ執事がとてあつて
あし一合一斤お水に五人あまらととら中
に沈て不動うんで不怒大坂よりりて美お
て怡くうあ一己の危は不者あら水をれ
あ氏稱す始終して自差うりあ子の氣象あり
て勇氣存り予是のあはれあはれあはれあ
てあし出し予が己の受用とあし又善行か
くのぞれとよくだらまあといふ又大人あ
きうじや

早井氏不剛と云ふ人なり病死せばも人未だ病あり
一これ予一日はく遊る早井氏云は此不思後世と
云ふ人未だ予に業方と云ふ人あり湯人多
分と入附ふ二分を加へ取はるく用はるく爰是て告
人と云ふは予曰く予不食して薬と毎日後身す
故よ爰はるく予歎稱して云はるく予に奇なり云
正人なりは予の思ふ所なり世人同思報至宴會に親爰
はわはドと云は持といへん予が母方の祖父ハ矢部氏
と云矢部ハ妻ハ正人なりと先づて早世す早世して
鯉より女子多し祖父も正しは者なれば母方の女も
おりのし其の育大切にして未だ寝くといは納戸に
にせり公入寝せくこと此れ公に祖父伏せり或は予

が祖母枕上よま存生の時ありくと云ふく爰とて
告く云今既に火難出来たりゆきとに寝たりのと
祖父爰覺起て見れば人なりおのりばは次れ間と見
せばわりのりなりをいふはこれば床よなとて
さう新しは捨のまれなりと小神懸いとておのり
さうんをいふに人なりをいふはつとてなるとて
さうおのりは志がまらておのりは妻ハ正人なりは
おのりは正人の不剛なりといふとこれなり爰爰にあ
らざけ火ひらけりたらまらば女子の寝るハ一方に
にしてにげおのりはさうおのりは皆やひ死せん事なる
ふゆかりなりと被稱し翌日一日此契稱して妻が
神にいふ事なりと父予に告げり今早井氏の爰も

妄愛にわづらふく其神業と微用ありて去る
 べしとて其妄愛なりとて不用ハ大痴危とせん
 平井氏笑云夫これ祖父母ハ正人なれば奇蹟あり予ハ
 不徳より何のふ徳ありんけし業と毎日に則ち
 に愛さんなりと予ガ云福業と付不位あり夫れ今縁
 縁時にあはば予ガ世をまてし音子篤実に見て自
 不徳なりとて妄愛とせば自欺よわづらふ去る近
 年虚弱なりといふはゆゑもわけ難し神業にあら
 ばとて妄とかなすよとて予ハ予ハ神なりといふ
 夫れ正人なる人ハば故も去るあり何ガ化人よ
 いふも又又同志より謙退し給ふとて人よあら
 びく再三とてむとて其は不用と見えたり果して

大痴とて死を病中予けて安否公同に内証痛
 びゆいおきて予独ありて伏しおがらいつり
 去る四愛の解今ハ悔に在り今に在りて
 せんかハ又余なりとて予は去るて洋
 神業と病乃おにりらひまうく大痴とて去る色死を
 げらふもあはべし自りむく人よわづらひらん
 去る篤実よとて予ハ不徳なり何ぞ神業ありん
 とおしんくさるべし是とて入り篤実にいふとてま
 密りの聖人の中なるはげし不及なきとて厚徳あり
 去る者ありとて彼神業あり後世よとていふがげ
 去る人しおしんくさるべし予も甲斐なれとて木
 りんくさるべしひらふおしんくさるべし去るは

悲歎神祇めりせりかり

彼慈母の流涙に記せしむとれ妻の母はまことに悲歎
の歎けりるる老老乃舅につきて孝道とけりし妻乃
誘ふると怒らざりてくくす唯一己の歎とけりし
妹が女工おこさずも嘆き起終啼て伏すまよとれ
いよごころくく街道は守つてくく髪と切紅白粉を
とくく歯とくく慈母くく称されば略といひく
再歎称せりるる

賛

舅既年耆老

宗子亦傲一謾

嫂嬪良益勞

神此女憐頌

和歎

うすも母ゆえとつらびおられさび

いつくむ子とあもれとぞおれ

なけまうき妹にとくめくお松の

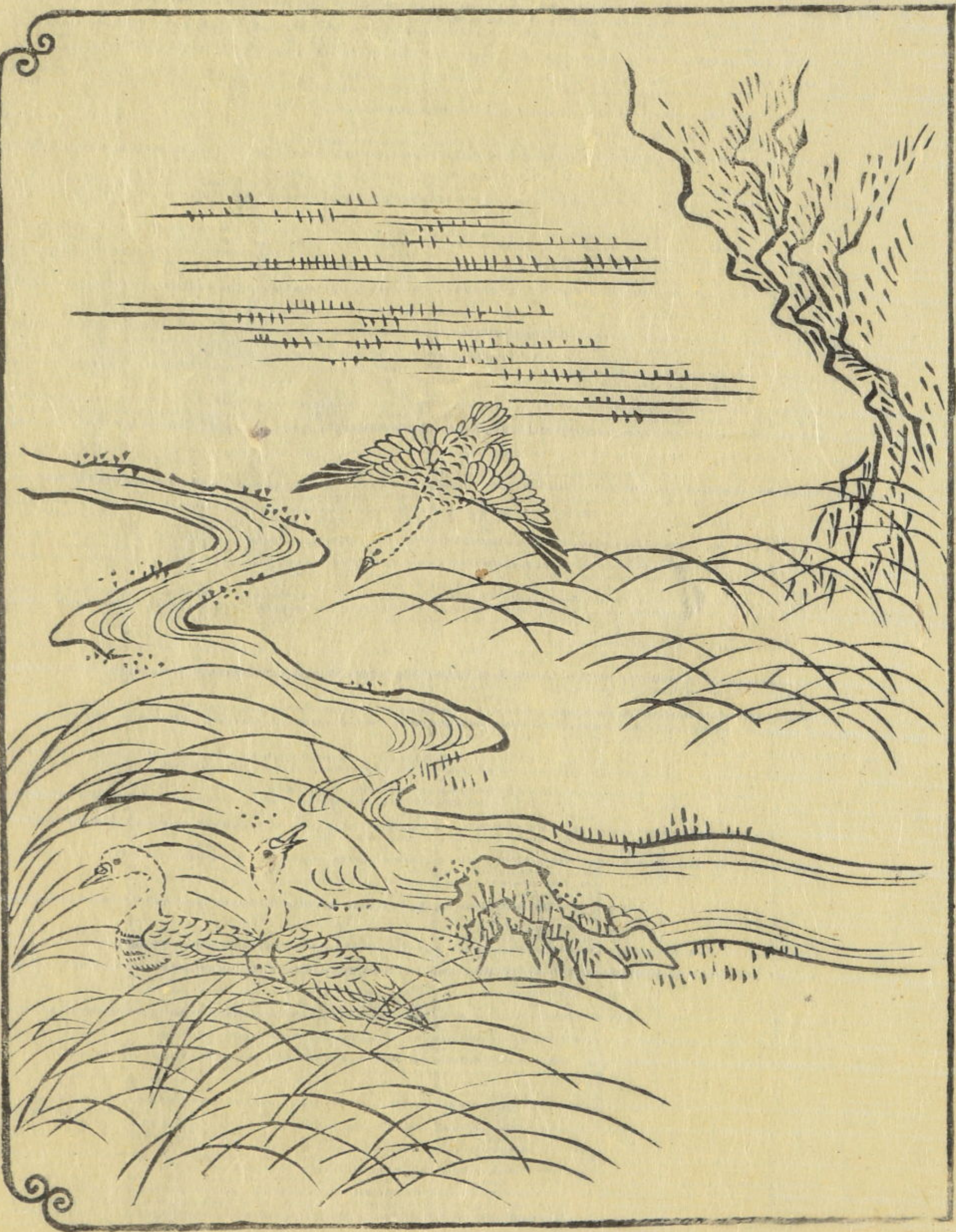
ちよせれりるとむりりあらし

評

善ふる若女も行皆凡女のおらむとら流るり
故は御告は皆慈孝と称せし婦人あはれなりと云
ども予が口よりあわらうとられ度あり後人
志くを称すべし列女のくやけさ行する又列
女はな及べしあはれも列女たりもそがれ
ころりあり予くよせのゆゆせと知るを
にけ辨とるして若女と稱と

論

或同此婦人の慈孝とんればまことに貞女の行なり
 慈母加えんに道は文と不學といへども教な
 とあまじけれうらハ不幸なり婦人の外はあ
 どり子夏曰事父母能竭其力事君能致其身雖
 白未學吾必謂之學矣とあらば婦人もそびえ
 にあつとや何ぞ貞と称せざるを慈母れ赤言に又
 せうとけしやせし妻ハさうりうらに母ハさうら
 猶廻とらるるまどとあらうもこれを通にあつ
 やむとわ行ぬし心志乃くこれりのハ男に
 してハ君子といへる婦人うしてハ貞女とい
 ひざる唯一の行なれば若称するの



同極廻と云ふれども道は入る心志のくくはるれども
もつち行の篤実よししく人は感動せしむらん
の仁と信とに出でし何ぞや 云ふらん睡起
此洲と云ふらん唯推別ありも外のものもはるるれ
あふぬあつてしつれはまぬの別とのづら
りく別と云ふらん行乃長幼序ありし
ふも外の事あるれども火氣とおほくはてせじ
たればとのづら長幼の別あり火氣ハ祀さればな
り各と云ふらん西海よりするなり彼の器は三
と本氣と云ふらん火氣とおほくはてせしこれハ仁
信慈孝一と本氣ハ養ふして信り信ハ祀して
去刻のりあるれども水氣定しく知てらるる

を心志くく一教とすて入る故は外れは女なり
家に教ありく幼ありは養と母はこれ道
とのまはば信一祀知てし一く今れ自ら
づればあつてし一とすなうすや故は聖代は
学校よりして八歳より小学に入成童よりして大學
に入人の天地の靈物よりして五行の合くけて純
粹なりといども其合はれは又序ありあり
ありる不及りくあつては故は幼童より成人は
あつて小学大學よりして一とすなうすや
はも序ありあつては人の世よりして一とすなうすや
くするもあつては推しるるく換はるるといはれは
あつては聖代の星と云ふる君にまじりて



さうりつとそなぐくさきにうりしとさ

賛

本分未_レ止_ニ人性善 商女守_テ義自然_ニ絢
好色充_テ満_リ店市間 獨_リ養_テ病_ヲ夫_ヲ若不_レ倦
私欲

じう一_レ序_クま_ルおとみぐ_クあ_ラは_レ由_ハぬ
お_ハは_レも_もとあ_らじ_ひに_くん_じ
つ_くさ_ぬ祿_けえ_うく_ハあ_らた_くに
さ_らじ_うさ_らた_らく_もと_らゆ_うん

詳

作_田舎_の人_さく_市所_の男_女ハ_らう_らく_又う_らく
つ_はひ_やう_し一_男ハ_或ハ_三口_人の_妻と_さり_ら女_ハ

或_ハら_もし_てま_はら_ねば_枕又_福け_高婦_操あり_てく
あ_まい_{たり}の_其心_勤ら_にあ_らず_かん_吾愛_ハ稔
然_らに_出たり_ま初_意慕_をま_はり_出たり_まれ_ば
し_とい_どと_す玉_の列_女ハ_列女_らり_呼喚_情わ_らぬ
ふ_新た_らう_か名_傷武_官の_あま_ま生_れく_ると_まお_お
と_密バ_貞女_の名_とお_おい_や

